
事業報告

平成18年度
公開講座概要

奈良大学総合研究所では、毎年、生涯学習教育および大学開放の観点から、また大学における研究成果の社会への還元方法の一つとして、「公開講座」を開催している。

「公開講座」は、(1) 本学が企画・共催、(2) 自治体等との協力で企画、の2種類で行われた。詳細については、下記をご参照いただきたい。

1. 奈良大学主催・共催講座

〈1〉第27回せいぶ市民カレッジ「奈良大学文化講座」

〈共催〉西部公民館・奈良大学

〈会場〉学園前ホール 〈開講時間〉10:00～11:30

〈テーマ〉歴史と文化～古代から中世へ～

〈定員〉300人

7月1日

廃都後の平城京
—平城上皇と嵯峨天皇—

寺崎保広

784年、桓武天皇は、都を平城京から長岡京に遷した。ここに奈良時代は終わりを告げ、平安時代が開幕する。やがて平城京は旧都として荒れ果ててゆく…というのは、やや正確性を欠く。桓武・平城・嵯峨と続く平安時代初期に、平城宮を再び都にしようという動きが見られたし、事実、平城天皇は退位後に平城宮に住み続け、ここで亡くなった。そして、それを裏付けるように、平城宮の発掘調査では平安時代初期の遺構がいくつか確認されている。

講座では、桓武天皇から嵯峨天皇までの政治の流れを概観しながら、桓武の「新王朝」意識、葉子の変、嵯峨朝の改革などについて述べ、さらに奈良時代の天皇・上皇と平安時代のそれとの違いについて検討した。

『方丈記』に「この京の始めを聞けることは、嵯峨天皇の御時、都と定まりにける…」と記すように、平安京は嵯峨天皇の時になってようやく都として定まったのである。

7月15日

遣唐使を送る宴

上野 誠

たとえ、無位無官であっても、栄達の道も開かれる遣唐使任命。しかし、それと引き換えに、海の藻屑と消える危険性もあった航海。それは、天平ドリームへの旅立ちでもありましたが、と同時に悲しい別れでもありました。天平4年に、多治比真人^{たじひのまひとひろなり}広成を大使とて任命した遣唐使は、翌天平5年（733）5月、難波を出航します。その折に、とある母親が、今は晴れて遣唐使となった子どもに贈った歌があります。

天平五年癸酉、遣唐使の船難波を發ちて海に入る時に、親母の子に贈る歌一首

〔併せて短歌〕

秋萩を 妻問ふ鹿こそ	秋萩を 妻として鹿は
独り子に 子持てりといへ	独り子しか持たないという
鹿子じもの 我が独り子の	その鹿と同じき わが独り子
草枕 旅にし行けば	その独り子が 旅に出るので…
竹玉を しじに貫き垂れ	わたしは 竹の玉を いっぱい通して垂らして祈る
斎瓮に 木綿取り垂でて	わたしは 清らかな甕に 木綿を垂らして祈る
斎ひつつ 我が思ふ我が子	物忌みをして わたしは祈る 我が思う子よ
ま幸くありこそ	無事であれ！ と

反歌

旅人の	旅びとが
宿りせむ野に	宿を取る野に
霜降らば	もし、霜が降ったなら
我が子羽ぐくめ	我が子を その羽で包んで暖めてやっておくれ
天の鶴群	天高く飛ぶ 鶴たちよ

この訳文は、母親の切ない思いを凜とした言葉で歌っていることを付度して、多少文語的な訳調で訳してみました。あまりにも陳腐な言葉になってしまうので、口にもしたくないのですが、母が子を思う気持ちは、今も昔もかわらないものだと、この歌を読むたびに思います。ことに反歌は、現実と願望をつなぐ詩的想像力のようなものを感じさせる歌となっています。この天平5年（733）の遣唐使の末路を知るとき、わたしたちは危険の大きさと、祈りの深さ再認識することになります。

では、母親はどのようなお祭りをして、息子の無事を祈ったのでしょうか。この歌には、母親が行った祭祀の様子を具体的にうかがわせる表現があります。最初に出てくるのが、「竹玉」です。「タカダマ」の「タカ」は竹です。これを「しじに貫く」と表現しています。「しじに貫く」とは、たくさん通すということです。したがって、竹をたくさん切って中に紐を通したも

のを作り、垂らしたのでしょう。おそらく形状としては、^{くだたま}菅玉状のものを想像すれば大過ないと思います。長さは、紐を通したときに垂れるように見えるというのですから、長くとも指の長さどまりで、小さくすれば1ないし2センチとくらいだった、とわたしは推定しています。

ただし、使用方法については、いろいろ考えられると思います。一つは、祭祀を行う者が、首飾りとして使用したことが、想像されます。竹玉と竹玉のあいだに、玉や勾玉を挟み込んで紐を通して、首飾りにした可能性もあるでしょう。もう一つは、祭壇を飾る飾り物として使用された可能性があります。その場合、なるべく祭壇の前にいる人に見えやすいように、まさに垂らすのだと思います。講座ではこういった遣唐使の帰りを待つ祭祀についてお話しました。

8月5日

猫の怖かった長者 —大和と伊賀の10世紀—

丸山幸彦

10世紀という時代は東アジア世界における古代律令国家群の解体にともなう、新しい中世の時代への出発点でもあった。日本列島においても同様であり、古代国家の解体にともない社会全体が激動していく時代になっていた。ちょうどこの10世紀から11世紀にかけて、山城・大和・伊賀三国にまたがって巨大な所領をもつ藤原清廉という有力豪族がいた。猫の怖かった長者として『今昔物語』にも登場してきていることで有名な清廉と、その息子である東大寺文書のなかにあられている藤原実遠という二人の人物の行動をとおして、この当時の日本の農村内部から上のいうことは簡単には聞かない自立的で積極的な農民諸層が育ちつつあったことをみていった。さらに話の舞台の一部になっている伊賀国名張郡については、後に東大寺の重要な庄園になる黒田庄が所在する地でもあり、この時期の庄園成立の背景について、在地豪族たちとのかかわりでふれてみた。

9月2日

中世の平等院

河内将芳

平等院といえば鳳凰堂を思い浮かべる人が多いように、平安時代の文化を代表する寺院として知られている。あるいは、10円硬貨を思い浮かべる人もいるかもしれない。しかし、平等院が現代まで伝来していることからわかるように、平安時代から時空を飛んで現在のすがたであるわけではない。平安時代以降の歴史を刻んで現在に至っているからである。本講座では、その歴史のうち、中世（鎌倉時代から戦国時代）における平等院のようすを主に文献史料（古文書・古記録）を用いて追ってみた。そうすると、平等院がいくたの戦乱に巻きこまれたことやそれによって多くの伽藍を失ったことがあきらかとなった。また、そのようにたびたび戦乱

に巻きこまれたのも、平等院のある宇治という地が交通の要衝であったことと深い関係があったことがわかった。それらを踏まえて、中世という時代における平等院の位置づけをあらためて考えなおしてみる必要性のあることを述べた。

9月16日

城が語る歴史

千田 嘉博

文字史料が豊富な戦国時代であっても遺跡から解明されることは多い。城跡は全国に4万ヶ所も築かれ、それぞれが政治状況や社会のあり方を反映した。城跡を調べることで文字史料の有無にかかわらず、地域の歴史を分析することができるのである。

たとえば城は一般に本丸、二の丸、三の丸というように階層的に築かれるのが当たり前だと思われている。しかし戦国時代の城では、本丸とほかの平場が並立的で横並びの関係になっていたことが多い。これは大名と家臣との関係が城の空間構造に表れたと読み解くことができ、大名と家臣とがお互いの権力を牽制しあった戦国期の実像を知ることができる。

また城跡を調べるだけでなく、保存し、整備していくことで、現代社会のなかでまちづくりに城跡を活かすことが実現できる。だから考古学や歴史学という学問的な視点だけでなく、文化財学という保存や整備・活用までを含めた枠組みで研究することの重要性は一層増してきているといえるだろう。

〈2〉第2回高の原カルチャーサロン 奈良大学心理学講座・地理学講座

〈共 催〉(財) 奈良市文化振興センター・奈良大学

〈会 場〉奈良市北部会館市民文化ホール 〈開講時間〉10:00~11:30

〈テーマ〉前期：生活の中の心理学 後期：海外への目

〈定 員〉200人

5月13日

こころの健康 —ストレスの心理学—

友 廣 信 逸

現代社会は「ストレスが高い」と言われている。実際、ストレスが惹起すると思われる病気や犯罪も多いのではないかと思う。そこで、「ストレスは心身にどのような影響を及ぼすか」「どのような出来事がストレスになるのか」「ストレスにどのように対処するか」などについて講義する。

5月27日

食生活と心理学

大坪 庸介

この講義では適応論的な観点から私たちの食行動に関する研究を紹介した。まず、生まれたばかりの赤ちゃんにも味の好みがあることを示した伝統的な学習心理学の知見を紹介し、それが栄養価のあるものを摂取し、成長の著しい時期に身体に害をなすものを摂取しないような仕組みである可能性について論じた。同様に、胎内に成長速度のきわめて早い胎児を持つ妊婦も、胎児にとって潜在的に毒となる食物を避ける傾向があること、つまり、つわりには適応的基盤があることを説明した。その後、世界各国でのスパイス利用のパターンが、スパイスのもつ抗菌機能を利用していると解釈するのにふさわしいものであることを示すデータを紹介し、文化が生物学的な意味での適応的なパターンを示す可能性を説明した。最後に、ある民族に多く見られる遺伝子のパターンが食文化の形成に影響を与える可能性として、乳糖不耐症とソラマメ病の事例を紹介した。

10月7日

中国都市の諸問題

石原 潤

計画経済期の中国都市では、「工作单位」毎に形成された「単位空間」において、人々の日常生活はほぼ完結し、職住は近接し、土地・住宅市場は存在しなかった。ところが、改革開放期になると、市場経済化と共に中国の都市はいくつかの問題点を抱えるようになった。土地市場の成立、住宅の私有化、通勤流動の拡大、「城中村」問題、出稼ぎ人口の急増、スラムの発生などである。講演ではこれらの問題を解説した。

10月14日

カナダの自然と人々の暮らし

深石 一夫

カエデの葉に象徴される豊かな森林、豊富で資源と広大な国土に3,200万人が居住するカナダの自然と人々の暮らしについて紹介する。合衆国とは異なり多文化・バイリンガルの政策をとり、カナダ独自の特色を見る。

10月21日

北米・南米への日系移民

池田 碩

- ・日本から出国した移民は戦前・戦後を合わせ約75万人であり、現在日系人は280万人に達している。
- ・ハワイ・北米への移民は明治初期から始まったのに対し、ペルー・ブラジルへの南米移民は明治中・末期からと遅れて開始された。
- ・第2次世界大戦後は北米への移民は少なかったが、南米へはアジア大陸、特に満州開拓農民などの引揚者による農業移民が再渡航した。
- ・戦後日本経済が復興し、高度成長しだすと南米から日系人の出稼ぎ者を受け入れるようになった。ブラジルの場合、日本から出国した総移民数が24万人に対し、1986年以降からの日本への出稼者は28万6500人（2004）に達し、現在では逆移民の状況に達しているが、北米からはそのような状況はみられない。
- ・しかし、いずれにしてもすでに4～5世に達しており、各国への同化・融合が進んでいる。

〈3〉 第6回世界遺産公開講座

〈共 催〉なら奈良館・奈良大学

〈会 場〉なら奈良館

〈開講時間〉13：30～15：00

〈テーマ〉世界遺産とその周辺

〈定 員〉100人

4月16日

世界遺産の背景

—屋久島・京都・奈良—

鎌田道隆

世界遺産とは何かについて、きわめて個人的な生活の履歴を通じて語った。屋久島は日本でもっとも早く世界自然遺産に登録されたが、登録には島の若い人たちの情熱と周囲の人々のあたたかい協力と支援があった。何百年も厳しい自然条件のなかで生き抜く智恵と信仰の心が、祖先たちの歴史で生まれ、屋久島の自然は守られてきた。京都は日本の中心都市として、先端的で豊かな人間の文化をつくりあげ、超一流の日本の技術と精神世界を持続的に継承することで、世界的に注目される文化遺産に登録された。奈良は1300年前には都であったが、廃都となることで、むしろ田舎的な感覚の自然と共生する新しい生活文化を作り、人間的で思いやりやさしさの精神文化を継承して、京都とは異なる文化遺産と認定された。世界遺産と環境問題は密接不可分であることを強調した。

5月7日

世界遺産と社会的ネットワーク —白川郷とベトナム・ホイアンの事例—

芹澤知広

世界遺産は、保存制度や行政組織によって階層的に維持されているのではない。様々な背景をもった個人が、それぞれの社会的ネットワークを利用しながら、様々な方面での活用を日々考え、実践することによって維持されている。

「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として世界文化遺産に登録されている岐阜県白川村荻町集落では、周囲の村々がダム建設などによって合掌造りの家屋を減らしていった1960年代に、観光開発と結びついて保存運動が始まり、その後、村外の業者との共同事業も計画された。

「ホイアンの歴史的町並み」として世界文化遺産に登録されているベトナム・ホイアンは、16世紀から17世紀にかけて「日本町」がつくられたことから、多くの日本人の関心を集めてきた。そして1999年の登録に先立って行われた日本の保存協力事業では、政府や私立大学よりも民間のボランティアが早くから大きな役割を果たした。

6月11日

聖徳太子の都市計画

酒井龍一

『日本書紀』によると、推古元（593）年、推古天皇の皇太子になった聖徳太子（厩戸王）が、推古9（601）年、斑鳩の里に「宮室」を建設し、同13（605）年には、飛鳥から同地へ移住したと云う。一方、各所の発掘で、「西偏21度」前後を主軸とする斑鳩宮跡・斑鳩寺・岡本宮・鮑波宮・中宮等の存在が明らかになりつつあり、現地表にもそれと並行もしくは直交する道路痕跡が各所に存在する。いわゆる「太子（筋違）道」もその一つである。こうした記事・発掘成果・道路痕跡などの情報を収集すると共に、斑鳩の里の「歩けオロジー」によって、「聖徳太子の都市計画」を復元する試みを行っており、今回の講座で、その「復元素案」を具体的に解説することとなった。今後、新たな発掘調査や文献史料・碑文・現存寺院等と対照させながら、より精度の高い「改良案」を作成していくことになる。

7月9日

正倉院宝物の魅力を探る

三宅久雄

正倉院宝物は長い間勅封によって守られ、由緒が確かであり、添えられた献納目録によって美術工芸品の特徴が詳しく解る。舶来品も貴重であるが、国産品は天平工人が技術の粋を示したもので、一方、明治期に多く修理・復元され、明治の工芸家たちが天平の技術に挑み、技を

競った跡をみることもできる。また、天平美術は華やかな印象を受けるが、中には白を基調とした落ち着いた上品な宝物もあり、色彩感覚の対照の妙がみられる。選りすぐられた名品が魅力に富むことは言うまでもないが、正倉院には東大寺で使用され、そのまま残った用具類がある。散華を入れた竹編みの籠や堂宇を飾った幡、飲食器などは何百と残っており、その数量において東大寺のスケールの大きさを実感させる。また造営機関である造東大寺司が用いた材料や工具、作業着まで残っていて、仏教国家として大きく飛躍しようとした天平人の情熱と苦勞を目の当たりにすることができる。

8月6日

世界自然遺産の魅力

—ガラパゴス諸島・コモド島・オーストラリア—

高橋春成

ダーウィンの進化論の島として有名なガラパゴス諸島は、世界で最初に世界自然遺産に指定されたところだ。ここには、ガラパゴスゾウガメ、イグアナ、ダーウィンフィンチ、ガラパゴスペンギンなどの珍しい生き物がいる。ところが、このようなガラパゴスも、17世紀は海賊の隠れ家となり、またその後も捕鯨船や船乗りたちの食料の補給地となっていた。彼らは、食料用にゾウガメやイグアナを捕獲して船に積み込んだ。また、食料源として島にヤギなどを放つたりしたし、彼らの船にまぎれて侵入するネズミなどもいた。このような人間による影響は、進化論の島の生き物たちを攪乱するものであり、ガラパゴスでは半世紀にわたって、傷ついた生物相や生態系を復元することに努めている。

その他、世界最大のトカゲ・コモドドラゴンが生息するコモド島、海域や陸域にいくつもの世界遺産を有するオーストラリアを紹介した。

9月10日

世界遺産はなぜ少ないのか？

—屋久島・白神山地・知床を例にして—

岩崎敬二

2006年8月現在、世界自然遺産は、世界中に160ヶ所しかないが、世界文化遺産は628ヶ所もある。日本でも、自然遺産は屋久島・白神山地・知床の3ヶ所しかないが、文化遺産は10ヶ所も存在する。自然遺産が少ない事は、UNESCOの世界遺産委員会等でもかつて問題となり、積極的に自然遺産を増やす姿勢が取られたこともあるが、未だにその目的は果たされていない。この講座では、日本にある3つの世界自然遺産、屋久島・白神山地・知床のそれぞれの登録に至るまでの経緯と、登録後の自然遺産登録地・周辺地域の行政による保護のあり方を紹介し、自然遺産の少なさの原因に関する以下のような3つの視点を、私見として提示した。

- (1) 自然遺産に登録されれば、保全地域の面積は文化遺産に比べてはるかに広大なものとなり、行政機構上も予算的にも保全が難しいこと。
- (2) 登録地での経済活動や人間活動が制約されるため、地元自治体や政府が登録に積極的ではないこと。
- (3) 自然の貴重さに比べて、経済的活動の方がまだまだ優先されており、豊かな自然の経済的・文化的・学術的・精神的価値が十分に知られていないこと。

〈4〉 第15回桜井市生涯学習シリーズ・奈良大学教養講座

〈共 催〉奈良大学教養部・桜井市教育委員会

〈会 場〉まほろばセンター（エルト桜井2F） 〈開講時間〉14：00～15：30

〈テーマ〉郷土を学び、新しい時代を知る

〈定 員〉100人

5月21日

古代の山辺の道々を想像する

水野 正好

桜井市の山辺の道々は古代の重要な“国道”ともいうべき道。この道々に沿い造営されていた各天皇の宮都、多くの人々の古墳を考えつつ、道々のにぎわいを大空を飛ぶ鳥の眼で想像してみようと思います。楽しいですよ。

6月18日

中高齢者の健康とスポーツについて

田原 武彦

中高齢者が充実した「生きがい」のある生活を創り出すためには、特に健康が重要です。本講座では、中高齢者の健康を維持・増進に立場から、身近で楽しく継続的にできる運動やスポーツについて実技を取り入れながら考えていきます。

7月23日

戦火と革命を生き抜いた 中国人夫と日本人妻

蘇 徳 昌

東北帝大の理学博士である中国人数学者と琴の師匠である日本の女性が夫婦になり、中国大

陸で半世紀以上の相思相愛の生涯を共にし、8人の子を立派に育て、想像を絶する戦争と革命を生き抜いた。その夫婦の信念とは？

9月10日

『太平記』にみる高師直

—吉野炎上など—

長坂成行

『仮名手本忠臣蔵』でも知られる高師直は、南北朝内乱を描いた『太平記』に登場し、そこでは反体制的、悪逆無道、背徳の権化のような人物として描かれ吉野焼き打ちの張本人でもある。その実像と伝説化のさまざまを探る。

10月22日

日本の出版文化あれこれ

—江戸の末まで—

宮嶋一郎

最近では、ワープロソフトを使って誰でも印刷できます。しかし我が国には、現存世界最古の印刷物百万塔陀羅尼を始めとして、江戸の錦絵に到る職人達の素晴らしい出版文化があります。その種々相を語りたいと思います。

〈5〉第14回都祁生涯学習シリーズ・奈良大学教養講座

〈共 催〉奈良大学教養部・奈良市立都祁公民館

〈会 場〉都祁公民館

〈開講時間〉14:00~15:30

〈テーマ〉自己実現をはかる生涯学習

〈定 員〉100人

6月4日

行基・重源・木喰を語る

水野正好

多くの人々の救済を通して大事業をなしとげた3人の人物像を丁寧にお話し、人生を問い、人生の赴くところを語りたいと思います。

行基は奈良時代・重源は鎌倉時代・木喰は江戸時代の仏教者ですがその行動は魅力あふれるものがあります。

6月18日

戦火と革命を生き抜いた 中国人夫と日本人妻

蘇 徳 昌

東北帝大の理学博士である中国人数学者と琴の師匠である日本の女性が夫婦になり、中国大陸で半世紀以上の相思相愛の生涯を共にし、8人の子を立派に育て、想像を絶する戦争と革命を生き抜いた。その夫婦の信念とは？

7月2日

天然記念物と外来生物 —日本の貴重な自然文化財とそれを脅かす生物たち—

岩 崎 敬 二

日本が世界に誇るべきユニークな自然保護の仕組みである「天然記念物」保護制度の現状と問題点を学びます。また、海外から日本に人為的に移入された外来生物が日本の自然に及ぼしている大きな影響を解説し、日本の新たな自然保護制度の在り方を考えます。

7月16日

現代日本に大人はいるのか

中 戸 義 雄

フリーターやニートの問題など、社会からの若者へのまなざしは厳しい。では、彼らを批判する大人たち自身は、当の若者にはどう映っているのか。相手を批判するだけではない、相互的・対話的な世代関係を考察していきたい。

〈6〉 第9回こおりやま市民大学

〈共 催〉大和郡山市中央公民館（三の丸会館）・奈良大学

〈会 場〉大和郡山市中央公民館（三の丸会館）3階小ホール

〈テーマ〉歴史・文化や今日的課題に学び、21世紀を夢と希望に満ちた人生に

〈定 員〉100人

〈開講時間〉13：30～15：00

開催日・演題・講師

回	開催日	講師	演題
1	6月3日（土）	教授 長坂 成行	『太平記』にみる中世大和の合戦譚
2	6月10日（土）	講師 土平 博	伊能図に描かれた大和の町と村
3	6月17日（土）	助手 栗田美由紀	古代の色彩と文様
4	6月24日（土）	教授 浅田 隆	谷崎潤一郎『吉野葛』
5	7月1日（土）	助教授 植野 浩三	古代大和の窯業生産
6	7月8日（土）	助教授 秋山 秀一	地域ブランドについて考える

〈7〉 第19回社会学部連携講座

〈共 催〉奈良大学社会学部・大阪市立難波市民学習センター

〈会 場〉大阪市立難波市民学習センター 〈開講時間〉19：00～21：00

〈テーマ〉「こころの健康を考える」～臨床心理学からのアプローチ～

〈定 員〉各回40人

開催日・演題・講師

回	開催日	講師	演題
1	10月3日（火）	教授 ハフシ・メッド	こころの働きと人間関係について
2	10月10日（火）	教授 前田 泰宏	臨床心理学からみる“不安と抑うつ”
3	10月17日（火）	教授 岡 達治	統合失調症（精神病）を知る

〈8〉 公開講座フェスタ2006

〈阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット〉

〈期間〉平成18年11月6日（月）～11月25日（土）

〈奈良大学担当開講日〉平成18年11月6日（月） 13:00～14:30

〈会場〉大阪府立文化情報センター

〈講師〉教授 永井一彰

〈テーマ〉西鶴の才覚—銀をめぐって—

2. 自治体等との協力公開講座

〈1〉 教職員を対象にした研修講座（奈良県立教育研究所）

〈主催〉奈良県大学連合に所属しているの大学

〈後援（協賛）〉奈良県立教育研究所

〈会場〉奈良大学総合研究棟（J棟）4階 多目的ホール

〈奈良大学担当開講日〉平成18年8月7日（月） 10:00～11:30

〈講師〉教授 千原美重子

〈テーマ〉「学校における教育相談のあり方について…発達臨床の立場から」

〈奈良大学担当開講日〉平成18年8月7日（月） 14:00～15:30

〈講師〉助教授 滝川幸司

〈テーマ〉源氏物語の人物像 —変容と物語の本性—

〈2〉 奈良県生涯学習カレッジ

〈生涯学習総合コース奈良県大学連合「なら講座」〉

〈奈良大学担当開講日〉平成18年10月6日（金） 13:30～15:00

〈会場〉奈良県社会教育センター

〈講師〉講師 土平 博

〈テーマ〉近世大和の陣屋と陣屋町

〈定員〉150人

〈3〉奈良県生涯学習カレッジ

〈主催〉奈良県社会教育センター

〈共催〉県下の8大学（①奈良女子大学 ②奈良教育大学 ③帝塚山大学 ④奈良大学 ⑤近畿大学 ⑥天理大学 ⑦奈良産業大学 ⑧奈良県立大学）

〈奈良大学の担当分野〉地域学コース

〈開講日〉平成18年10月28日（土） 13：30～15：00

〈会場〉奈良大学総合研究棟（J棟）4階 多目的ホール

〈講師〉教授 酒井高正

〈テーマ〉電子地図で見る奈良の姿

〈定員〉150人

あ と が き

奈良大学総合研究所所報第16号には、論文5編、研究ノート4編、資料2編、研究助成概要報告3編および「平成18年度奈良大学総合研究所特別研究」レバノン共和国テイル郊外ラマリ地区所在ローマ時代壁画地下墓TJ04保存修復研究2006年度概要報告を掲載しました。

本研究所では、大学からの助成金による助成研究と特別研究及び文部科学省科学研究費補助金による研究のほか、民間企業からの受託研究も管轄し、教員の研究活動の支援と、その公開に努めております。

教員の研究論文は、所報や奈良大学紀要に収録し広く研究成果の公表に努めています。また、教養部を主体とする桜井市教養講座と都祁教養講座、文学部を主体とする文化講座や社会学部公開講座を実施して、さらなる充実・発展を期して来年度の計画を進めておりますので、今後ともご支援とご指導をお願いいたします。